

教育再生実行会議（第11回）議事要旨

日 時：平成25年8月23日（金）15：00～16：30

場 所：首相官邸4階大会議室

出席者：安倍内閣総理大臣、下村文部科学大臣兼教育再生担当大臣、杉田内閣官房副長官、丹羽文部科学大臣政務官、義家文部科学大臣政務官、富田衆議院議員及び有識者11名

○ 安倍内閣総理大臣より冒頭挨拶があった。

「教育再生実行会議」においては、6月以来、大学入試をはじめ、高校と大学の接続の在り方について、諸外国の実情なども伺いながら、議論を深めてきた。その上で、7月から8月にかけて、委員の皆様が大学などの視察を精力的に行っていた。改めて感謝申し上げたい。

今後、高校と大学の接続の在り方について、更に議論を進めていただきたい。その際、大学入試の「仕組み」に焦点が当たりがちだが、そもそも大学入試は高校教育と大学教育を橋渡しするものであり、大学入試を含めた教育プロセス全体としてより良いものにしていく視点が不可欠だと考える。このため、大学入試のあるべき姿を議論していくためにも、「高校や大学の教育はどうあるべきか」という基本論を深めていただきたい、そのことが極めて重要である。

こうした観点から、本日は、高校教育、大学教育の在り方について議論いただく。

委員の皆様におかれては、これからの教育の大きな方向性について、率直な、そして関連な発言をいただきたい。

○ 鎌田座長から、高大接続・大学入試の在り方を議論する前提として、本日は、高校教育・大学教育の在り方について議論する旨の発言があり、高校教育・大学教育にかかる論点について説明があった。

○ 高校教育・大学教育の在り方について討議が行われ、各有識者等より以下の発言があった。

（川合委員）

○ 一番大事なのは、解決すべき課題を自ら提案し考え、社会に貢献する人材の育成。グローバルに活躍する人材の育成には、世界を知り、かつ日本を知ることが大事。平均寿命が90歳に近い国なので、生涯にわたって基礎となりうる一般的な教養を高校と大学で獲得して、シニアになってからももう一回学び直す機会が与えられ、基礎的なところを基に違った分野にも活躍できるようにすることが高校、大学の教育を考える上で大事なポイントになる。

高校も大学も学校での教育と同時に、社会の中での生き方を学ぶ機会をつくる必要があり、そのためには、全てを学校の中で過ごすのではなく、自由度ある活動ができる時間配分にすることが大事だと思っている。

高校教育に関しては、極端に専門に特化せず、幅広い内容を学習して豊かな教養を習得することを基本とすべき。当然、理科教育の特化など、一部の専門教育の強化を併用することは推奨されるべきだが、それによって広い教養を身に付けるという本来の目的をおろ

そかにしないようにする必要がある。

15歳で将来の方向を限定してしまう教育では人生の選択を限定することになるので、なるべく広い可能性を残すことが必要だと思っている。

高校教育が全ての生徒にとって3年間必要かどうかは前回も議論があった。早期に次のステージに進むことが可能な生徒を、足踏みさせるのではなく、きちっと高校卒業認定をした上で、上位校への進学が許されるシステムであってほしい。

大学の教員から見ると、高校生の授業が少し専門化し過ぎている。理系でいえば、大学で生物や医科学を学ぶ上で物理や数学の知識が欠かせないことや、情報化の社会では文系の学生も数理学のような知識が必須であることを高校現の先生もあまり意識していないことがあるが、大事な情報であると思っている。

そのため、大学からも最新かつ最先端の情報を提供して、高校生の将来にとって何を学習することが必要か、適切な情報共有をすることが望まれる。

(山内委員)

○ 2点だけ。まず、高校時代において、基礎的な能力、学力をつけることは言うまでもないが、同時に、成人として社会を担っていく、社会人となるための助走期間でもあり、きちんとした規範意識を身に付けることは、知の向上とともに、社会的ルールを守る意味と責任を理解させることを論点に入れるべきだ。

2つ目は、目標や志について主体的に考察するのは大事だが、わかりやすく受け入れてもらうために、最初に夢を持つ大事さについて説く。そして、夢を持つと次に、実現していくための具体的な決意や気構えが必要になる。そうしたプロセスを通して、自分の理想を志として高くし、実現していくということを、子供たちに夢と志を対として教えていただきたい。

(加戸委員)

○ 高校教育は、どうしても「よく学び、よく遊び」になってしまいがち。基本は、「よく学び、よく遊べ」。愛媛県でやっている俳句甲子園では、高校から5人の代表選手が俳句を出してディスカッションしてチャンピオンを決める。一つの試みであるが、言うなれば高校のカリキュラム以外のもので、芸術、文化、スポーツ、何でもいいが、何かを生きがいに、心に潤いを持って生きるようなものの素地づくりをするのが高校段階ではないか。

学業も大切だが、遊ぶことも大切で、少なくとも1つの主体的な活動を指導することを、提言の中で強調してもいい。

あわせて、これから日本国を支えるのはボランティアだと思う。そういう意味で、高校段階からボランティア活動を義務づける、または準ずる形で学校としての取組みをもっと奨励すべきだと思う。愛媛県知事時代に県民へのボランティア活動を呼びかけた。地域によって参加率の高低があったが、高校生が参加すると、参加率が上がる。高校生がボランティア活動の先頭に立てば、地域住民も付いてくるのではないか。

(武田委員)

○ 論点に関して大変共感する部分が多い。さらに肉づけされ、発展されることを望む。私の場合、高校生の時に日本代表に入った。年上の先輩方と同じことを求められ、日本人が世界で戦っていく時にどんなことで勝負できるのか、自分の強みを自覚しなければならなかった。また、会話の中でも知識の豊かさが理解力の深さにもつながっていく。分から

ないままでは自分が足を引っ張ってしまう。理解したものを瞬時にどう使うかという力が、高校生の時から必要だということを強く自覚した。

そういうことを出来ないと悔しいという思いから、克服したいと思って行動できるようになっていった。論点にも書かれているが、高校の時から、海外に出ること、課外活動を積極的にすることで、学業だけでは感じにくい部分を認識する機会になるので、もっと高校教育の中で重視されることを期待する。

さらに、世界で勝負するというメンタルや視野、そして日本人が実はすごく能力があるのだということを教えてくれた存在が指導者だったので、大人や学校の先生が責任感を自覚しなければならないと痛感している。

今回、高校野球などを見ても、進学校の活躍が大変目立つ。勉学もちゃんと取り組んで、スポーツの世界でも結果を残すことができることには期待を見出している。そういうことを教えらる先生は多いはずなので、学校全体のカリキュラムにどう反映していくかということも議論が進められるとよい。

(鈴木委員)

○ 10代の後半は多感な時期で、ひとつの刺激でもものすごく力を発揮するし、そこで将来の人生設計のスタートラインに立てる時期なので、様々な形で、意欲的な若者に挑戦的な場面を体験できる機会をつくるのが教育再生の上で非常に重要だと感じている。

学校で生徒に一番影響を与えられるのは教員。ところが、近年の教員の意識やモチベーションが低下していて、なかなか生徒に影響を与えられないし、力強くやることができない。そのため、教員が熱意を持って生徒の指導に当たり、学校現場を魅力化するにはどうすればいいか、教員の議論を深めていく必要がある。

一方で、ひきこもりの増加は大きな問題になっている。少子化の中で、学校教育又は教育の現場としてどうするかということが大きな問題であり、ひきこもりについても、対応していきたいと考えている。

グローバル人材の育成に関連して、この夏、被災地でボランティア的に農作業をやっていた中で、集落の中に若者の姿が見えないのに改めて驚いた。津波被害を受けた土地でも若者がいない。若者が責任を持ち、意欲を持って取り組まなければ地域再建はできない。グローバル化は、一方では地域に拠って立つものであり、それを担う若者が十分そこで生きていける力を育む必要があると改めて感じた。

海外の体験については、熊本県で「海外チャレンジ塾」をやっている。派遣する生徒の前で蒲島知事が1時間にわたって英語で話し続けたところ、生徒は驚いて、私達の知事はこんなにしゃべる、熱意を持っていると感動したという。このような動機付けが必要であり、地方公共団体の取組みを国が支援すれば、生徒の意識も目も輝いてくる。

高校が魅力を失ってしまっている。高校に役割を課して、小中学校よりも専門性の高い地域の学習の場であって、地元の文化を育てたり、受け継ぐ場としていくべき。何かの役割があれば高校の先生もモチベーションが上がり、意欲が高まる。

(佃副座長)

○ 論点については基本的に賛成だが、メリハリをつける意味で、高校教育について「社会の発展に寄与する態度」の「態度」というのが非常に漠然として何のこと分からない。これは社会の発展に寄与するという志と夢と責任感を高校時代に育成するのだということが必要ではないか。もう少し具体的に言わないとわかりにくい。

論点2の高校教育で「何をすべき」については、「高校生の多様性を踏まえた特色化」が一番大事なのではないか。東京都の都立高校のパンフレットを見て、よくここまで踏み込んでやっているなど思った。すなわち、普通科はランク分けがなされ、中学校の学び直しの高校もきちんと用意してある。それから、工業高校、農業高校等の専門高校も用意し、さらに深く勉強しようとしたら、大学にも行ける。

このように、機能分化がなされ、高校生が選べるようになっている。差別ではないかと言う人がいるが、これは先生方の手がすくむ最も悪い言葉ではないかと思う。生徒の多様性に沿って、生徒みんなが誇りを持って高校生活を送れるようにするための教育であるという認識を周りも本人も持つことが大事なのではなかろうか。

(大竹委員)

○ 1980年にレーガン大統領がベネット教育長官のもとで教育改革をされたのを参考にしたい。一言で言うと、価値教育ということ。価値の創造を強く訴えている。この価値教育は、3つに分かれる。

1番目は認知的な領域、2番目が情意的な領域、3番目が心理運動領域となっている。これは全人的な開発手段であって、参考にしたい部分ではないか。3つのCで括っているが、1番目はキャラクターのC。2つ目はコンテンツのC。3つ目がチョイス（選択）のC。これらを価値教育改革と呼んでいい。将来、総理からまとめていただくときに、教育再生実行会議で3つか5つぐらいの項目で発表するものをまとめれば、全国民が納得すると思う。

(八木委員)

○ 今、高校は7割が普通科で、これは数字として高過ぎる。教育再生の目的を、世界と戦って勝つ強い日本人の育成、と考えるならば、全体として活力をどう生んでいくのかということが必要になってくる。この論点にも出てくるが、そのときのキーワードは多様性ということではないか。

そこで2つ。1つ目は、6・3・3制の議論とも重なるが、複線型を含む多様なコースを高校で用意すべきではないか。普通科7割ではないということ。

2つ目は、優れた人材を活用するという意味で、国家戦略と考えれば、大学への早期入学を可能にするような措置も必要ではないか。そういう意味での多様性も考えたらどうか。

(佐々木委員)

○ 論点はよくまとめられている。その中で強調したいのは、特に高校教育における、知育、徳育、体育、これをもって全人教育と言うわけだが、実際には、圧倒的に「知」に偏っているように思えてならないことだ。

先日の慶應大学の視察で、一番驚いたのは、AO入試における面接、面談の重要性だ。面接にかかる時間が、一番短い先生で30時間、一番長い先生は100時間以上かけている。このことがすごく大切だと思うし、また学生も目的や目標意識を持ち、社会に対しての貢献や価値につながるような意見を述べていてしっかりしている。

塾をやっている関係でよく分かるが、一番落ちこぼれたり、高校中退が多いのが高1の1学期終了時。多くの人が受験をして高校に入るが、その入試は知識の詰め込み教育の域を出ていない。なぜ学ぶのかという部分について、高校入試からそういう知識重視や偏差値的なものを脱却してやるべきではないだろうか。時間数的にもインプットの時間が多く

て、アウトプットが少ない。高校教育以降、私たちは正解のない世界で探究し、学んでいくわけであり、そういう部分で高校教育の役割はすごく大きなものがあると思う。

事前提出した資料に、受験産業の中で偏差値の権化と見られるような民間教育の立場からも、やはり志を高めていくような教育が大事という意見が出ているので紹介したい。

(河野委員)

○ 高校教育、大学教育における一般的な教養や専門的な知識の習得は、論点にもあるように、義務教育の基礎の上に成っている。規範意識、夢やそれを実現する力をつける、志を育む、責任感を持たせる、そういったものは、高校からではなく、当然義務教育の段階から身に付けさせていくことが大事である。

もう一点、国際化に対応できる多様な人材の育成が必要であろうと思う。それぞれの高校、大学、大学院が育成しようとしている人材像を明確にし、そうした人材を育成するために特色ある教育を推進し、育成した生徒や学生を、責任を持って社会に送り出す機能を強化する必要があるのではないか。それぞれの特色を生かし、たくさんの学びの選択を用意することも多様な生徒に応じる学びという点で大事ではないかと思う。

(安倍総理)

○ 高大接続や大学入試の在り方、高校の存在意義そのものについて議論し、変えていくというのは、大変野心的な試みである。同時に、子供たちは今のシステムの中で勉強していて、それぞれのコースを選択している。先ほど下村大臣とも話をしたが、まずは我々の議論が高校生、中学生や御両親を不安にさせないことも大変重要なのだろう。そのことも踏まえながら、どのように変えていくか、よく議論していく必要もあるのだろうと思う。同時に、今議論を伺っていて、白地からつくっていくという皆様の意欲を感じ、大変頼もしく思った。

それぞれの論点は非常に難しい課題等を含んでいるが、生徒の多様性ということを重視していきたい。多様性というのは複線化にもつながっていくわけであり、多様性の捉え方にもさまざまあると思うので、ぜひ広く捉え、多様性をキーワードとしていただきたい。

その中での高校の役割は、大学に行く過程の準備期間である3年間という捉え方になっていて、結局、その後、大学に行かないのは一つの単線の中ではドロップアウトという思いにとらわれていくことになる。場合によっては一生そういう思いにとられることになるかもしれない。しかし、そうではなく、生徒の多様性に対応した高校の役割と高校そのものの価値を高めていくことが大切なのだろう。そもそも高校が3年間でいいのかどうかという議論もしなければならず、論点1がまさに基礎的な論点なのだろうと思う。

どういう結論になるにせよ、現状を変えていくことになる。その時間軸はまた議論いただくが、相当さまざまな議論を呼び起こすことにつながる。しかし、まさに教育再生実行会議が教育を変えていく大きな場であり、ここから物事が変わっていくということであるので、よろしくお願ひしたい。

(富田衆議院議員)

○ 私は15歳で親元を離れ、高校3年間下宿していた。四畳半に2人で下宿し、サッカー部で、ずっとサッカーをやり、空き時間は本を読んでいた。そういう意味では、3年間で自分の将来をよく考えられた。今の高校生は忙し過ぎて、そういうことができないのだろう。そういう中で、自分は将来何になるのかを考えられるような教育が大事ではないか。

規範意識を養うという意見があったが、いじめ防止対策推進法案に親の義務、家庭の義務として、規範意識を養うように子供を育てると書いたら、家庭教育への介入だという反対意見が出た。人の物を取ってはダメだし、人を殺してはダメだと、当たり前のお話を子供たちに教えるのは親の役目だが、そこに反対意見が出てくるのは社会が歪んできているのではないか。小さい時に規範意識をきちんとわきまえるようにならないと、大きくなって色んなことができないのではないか。

(佐々木委員)

○ 60名のひきこもりの若者を3年間ほどサポートしてきた。ひきこもった背景を見ると、約3割の子は幼児の時に親から虐待を受けていた。約3割の子は軽度の発達障害というところから自尊心も低く、いじめにも遭っていた。約3割の子は、中学1年生の時に友だちから「調子に乗ってる」と言われて、呼び出されて、そこから人が怖くなったということで、結構根が深い。不登校、中退、ひきこもり、それが何十万人いるということだが、多様化の教育というのがあったが、そういう子どもたちにもきっちり教育していくことが大切ではないか。高校教育においてもそこが重要だと体験上感じた。

(川合委員)

○ 慶應大学の視察に行った時に、自発的な発言をする学生がいっぱいいた。その大半がかなりの年数を外国で教育を受けた方で、日本の教育ではああいう人はなかなか育たないのではないかという思いで拝見していた。集団の99人と1人になっても、あるべき姿でやるのだということを恐れずに言えるような環境の中で教育はなされなければいけないのではないかという強い思いがある。学校の指導でボランティアするのもいいが、学校から解放されたところでも、個の意識で動ける人間を育てるのが次の教育改革にはあってほしい。

夏休みを長くにとってインターンシップをする、違うところに飛び込む、そういう経験がすごく大事なのではないかと思うので、何か学校教育と違った社会教育の場を創出する試みを、地方自治体でもいいが、ぜひつくっていただきたい。

(大竹委員)

○ 私は50年間アメリカの企業、しかも金融機関にいて、金融資本主義は本当の資本主義みたいな感じになっているが、私個人としては非常に懐疑的。では、これから、どういう資本主義を選択すればいいかというと、社会的価値創造型資本主義と言いたい。社会的背景というバックグラウンド、ベースをしっかりしてやるのが高校教育においても大学教育においてもすごく大事なのではないか。努力という言葉はありふれた言葉で案外軽視されているが、天才や英才は決して優れた知能、IQが高かった人ではなく、努力の積み重ねの結果、大秀才や英才が誕生していると思えてならない。そのことをシカゴ大学の教授が追跡調査した結果も出ている。自信を持って「努力せよ」と家庭内でも学校でも言い続けないと、君はもうダメなのだということになってしまうと本当にダメ人間になってしまう。ダメ人間などいないということを逆に学校の先生は中心に置いて教育してもらおうをお願いしたい。

(八木委員)

○ 日本の大学は、つい最近までは、一部の人しか行けなかったが、今日、51%が大学に進学している。その大学のシステムは、明治の時からほぼ変わっていない。すなわち、専

門家養成のための専門の学部が用意されている。ただ、今後、我が国の大学においてどういう人材を育成するのか、社会としてどういう人材の育成を求めているのかということを見ると、一部の専門的な知識に特化した人達ではなくて、幅広い国際的な教養を持ち、かつ語学力を含むコミュニケーション力があり、さらに日本人としてのアイデンティティをしっかりと持っている、そういう人材だと思う。そう考えると、我が国の大学教育はあまりにも専門教育に特化していることに問題があるのではないか。

もちろん、世界的な研究をやる専門的な研究機関、又は知識や資格、そういう専門人の育成を行う大学があってもいいが、大半の大学は教養学部のようなものにしていく方が社会のニーズには合っているのだろう。

もう一つ、大学の教員は、大学はあくまでも研究機関だと思っている。高等教育機関ではあるが、教員の認識としては研究機関。その教員の研究に学生は付き合わされる。今後は、大学は文字どおりの高等教育機関に変わっていくべきで、教員の認識も大きく転換していかなければならない。

(川合委員)

○ 八木委員の意見は、一部大変賛同する。ただ、4年制の大学全てがそれでいいかという点と多分そうではなく、前半の時期では、早期のところはやはり本当の意味での高等教育機関として、幅広い、しかも少し高度に専門化したところも含めた教育をすべきだと思う。

しかし、その上に今の大学院につながる高度な専門的な教育機関も必須であり、今、6・3・3・4と言って、その上に大学院が2だか5だかふわふわとした感じで付いているが、その辺の切れ目をどこに入れるかは今後大きな論点になるのではないか。18歳で大学に入学して、直後から極度に専門化した教育をしていることの弊害が専門分野でも出ていて、これは一度深く議論すべきポイントだと思う。

一方で、高度な高等教育機関としての大学教育の位置づけと、高校のつながりは切り離して考えられないので、この議論の中でぜひ整理していけたらと思う。

(山内委員)

○ 今のお二人の意見は、それぞれ非常に正しいところが強調されて、必ずしも矛盾するものではない。教育における多様化、多様性、複線化、こういうことに関わる問題だと思う。全ての大学が、東京大学のような大学を目指すことはないにも関わらず、偏差値その他の理由から、小型東大化ということになってきた現状についての懐疑心は八木委員から寄せられたとおり。

あるべき大学教育を実現するために何をすべきかという点で、大学院教育の重視は、第三次提言でも強調されたように、今回もまた指摘されることになるのだと思う。

ただし、大学院教育の重視を言う場合、現実にポストクの就職問題、そして、高等教育の担い手や研究の担い手が、就職がなくて非常に不安定な状況に置かれているという現実がある。これをどう解決していくか、解決の展望も示しつつ、大学院教育の重視に触れていく必要があるかと思う。

先ほどの川合委員の話に戻るが、学校教育と違う教育の場の創出はそのとおりだが、かなり高いレベルの話題であり、東京などの大都市部の話ではないかと思われる。ここで問題にすべきは、社会的なルールや人間として守るべきいろいろなけじめのようなものが、ますます欠けてきている。これをどこで教えるかという点、地方の公立学校教育と良質な家庭のしつけだということだ。

その際、先ほど佐々木委員から「知」と「徳」と「体育」に関する教育の割合が非常に「徳」において低い、高校教育において規範意識は大事だと。それを無くして夢を語るのも虚しいし、ましてや夢を志に高めていくことも難しい。そもそも学校教育と違う場所でそういう教育の場を設けると言っても、具体的にその場所が高校以外のところでどうあるかは、地方の公立普通教育を受けている生徒と家庭の場合はなかなかむずかしい。そもそも解決すべき課題が分かるというよりは、子供たちは進学校や私立一貫校のような高いレベルにあり、あまりいじめとか落ちこぼれとかで問題がない子供たちが多いのではないか。だからこそ、のびのびと大学に進学し、積極的なことを語れるということにもなっているのだろう。したがって、こうした特権的な子供たちでなく、もう少し普通の公立高校と地方の現状に基盤を据えた堅実な議論をしていくほうがよい。

(佃副座長)

○ 大学の多様性を踏まえた機能強化については、大学の組織としての多様性という書き方をすると、一部には大学は元々多様な価値を追求しているのだから、そもそも競争原理は大学や教育には働かないという議論が横行する。これを非常に心配する。それぞれ多様な人にどう対応して教育していくかというのが大事だが、大学の先生方と議論していると、大学が多様であるから評価はふさわしくないという考えを感じることもある。こういう表現は気を付けて、むしろ多様な人材をどう教育し、どう強みを伸ばすかという意味だろうと思う。それぞれの大学が組織として研究成果や教育成果の大学内外での競争、評価とそれに伴う予算配分など特色のある多様性のある強みというのを出していくことが大事なのであって、評価は当然受け入れるべきではなからうか。ともすれば誤解する方がいるので、表現の仕方は気を付けたほうが良い。

(大竹委員)

○ 大学は学生のためである。武芸を学ぶときは練習試合や稽古、他流試合などをするが、それぐらい学生と教授が真剣に向き合って活発な議論を高めていく教育現場、そういう大学の文化、そういったものをつくるのが大学を変えていく1つのきっかけになりはしないか。米国などで教授が授業をやっている、生徒がすぐ質問という感じで立ち上がってくる。それを制止しない。教授も聞く力を備えていて、間違っただ意見でも罵倒しない。逆に褒めてやることもある。日本の今の授業の在り方を、もう少し創意工夫されれば楽しい授業が展開できるのではないかと感じている。

(佐々木委員)

○ 私の家にアメリカからの留学生がホームステイしていた。アメリカ留学から帰ってきた長男が英語力を高め、キープすることという目的があったが、日本語、韓国語、中国語を話せるということで、結局ほとんど英語を使う機会がなかった。彼は私の家にながら1日に8時間勉強していた。

高校の時、彼は家で宿題をやることはただの1回もなかった。学校からそういう指導もなかった。ついては学ぶということに関しては非常に乾いた状態で大学に入って、教養を学んで、猛烈に勉強して、またもっと学びたいから大学院に行っている。でも、日本の場合、大学受験で伸び切ってしまう子が大半だと思う。そこから、もう一度学べと言われても、高校でも学んだし、大学の先生も大して教え方は上手ではないし、やる気が出ないという悪循環を引き起こしてしまうのではないか。いろんな大学の価値観はあるにしろ、一人一

人の大学生についてマスプロ的ではなくて、もっと一人一人への手当て、面倒を見ていく形で、教育、指導、育成を行っていくべき。

やはりガバナンスがきっちり強化される中で、大学のカラーを前面に出していけないと、少子化の中で生き残っていけない。きっちりとガバナンス強化するところから大学の生きる道を見つけていかなければダメだと思う。

(鈴木委員)

○ 大学のガバナンスは、大学の一番大きな課題と受けとめている。理想とするところはいいのだけど、ガバナンスの問題で挫折してしまうとか、東大の秋入学もいろんな理由があって後退した。あれだけ騒がせておいてと、その後ろにいる高校生達や受験生達の大きな動揺を誘っていて、ええっという感じで現場も、家庭も受けとめている。まず、大学の先生に目を覚ましていただきたい、というのが私の希望。

というのは、私自身も様々な形で高大接続をやった。大学とは一体何だ、何を勉強するのだということを知る上でも、生徒が早い時期に大学の授業を受けるのがいいことだと。そうしたら、大学の先生方、教授会などの反対が大きかった。高校は大学に授業を下請けさせるのかと。それぐらいの認識しかない。ところが、授業を受けてみたら、非常に熱心に受けているわけで、終わってみて、この子たち、全部自分のゼミに欲しいと言う。学部の学生よりも高校生ぐらいの段階で学びを求めてくる子のほうが学ぶ意欲が強い。だから、この子たちは非常によく伸びていて、附属一貫のところはそれを有効に活用してやっていくことが大学自体の意識付けにもなってきた。

ところが、肝心なところになったら、今度はトップが交代する。トップは晴れ晴れとした顔をして交代していく、学部長は特にそう。ようやく学部長から解放されたと。やはり大学自体がはっきりした形でガバナンスを確立して学校の経営が学長の方針のもとでやっていけない限り、高校側もなかなかちゃんとした計画や対応ができない。

あと、高校にいろいろ希望があるのはわかるが、この教員数、この予算でどうやるのかという問題がある。ぜひ教育再生実行会議としても教員数の問題、そういったところへの働きかけもして条件を整備し、教員である限りは、この条件でしっかりやりなさいと進めていくのが大切。

(山内委員)

○ 今の制度では、東京大学をはじめとして大学が積極的に自らを変える力や機能を持ち合わせていない。教授会の自治能力というのは非常に高い。予算配分や人事権などの既得権益や自分の属する共同体の利益を自分で潰すという発想は大学に限らず、どの集団にもない。これは、別に官僚機構、行政官僚を中心としたビューロクラットだけの問題ではない。大学人などは、最も既得権益に浸かっている最後の集団だという認識が弱い。

大学の一番困った点は、構成員が知を生業にしている職業だから、既得権益の見直しや再配分に反対する論理構成能力と反撃する能力がある。基本的には、既得権益と従来の慣習の維持に尽きるのだけれども、そこをそう見せないような巧みな技と経験を持っている。これを変える知恵を大学の外の皆さんは、どう考えられるか。

(佐々木委員)

○ 2つある。一つは、トップの強烈なリーダーシップで、「あれはどうなのか、これはどうなのか」と言って詰めていくこと。ただ、それはまれな例なので、もう一つは、通常の

場合は法改正を含めて、教授会がトップのリーダーシップを邪魔しない、そういう権限を行使できないようにすること。法が整備された中で、ガバナンスをきかせ、きちっとリーダーシップが発揮できるようにしていくこと、この2点だと思う。

(鈴木委員)

○ 大学改革はできると思う。改革への作戦もあるが、やはり改革の支援体制、つまり予算的な裏付け、民間の支援などをしっかりつくっておくことが必要。

(山内委員)

○ 二人の意見はそのとおり。まず、1つ目。リーダーシップはそのとおりだが、教授会構成員が学長を選ぶというシステムになっている。これはトートロジーみたいになる。

2つ目は、基本的に言うと、最終的には法の問題にならざるを得ないのだろう。恐らく国鉄や電電公社の分割民営化、こういう既得権益層などが社会発展に関してひずみを持った時の改革のように、政府や政治家の覚悟と世論のバックアップと大学の側に改革に呼応する良心的な力が働くということがなければ、今のシステム改革もなかなか難しいということになる。大学に預けても、そうした覚悟を持って進めることができるかどうか、なかなか無理なところがあるのが現実ではないか。

(川合委員)

○ 日本の大学のように教員が経営を含めて自主運営している大学は世界でも非常に珍しいケースであり、欧米の大学のほとんどは、大学経営者という経営専門者がいる。そういう人たちが1つの大学から次の大学と経営手腕を買われて動くシステムが現実動いている。

日本の大学も経営する集団と運営する集団が分業する時代が来ているのではないか。特に、研究科長や専攻長になると忙しくて教育もままならない現状は改革すべきで、運営の事務、アドミニストレーションをするためのプロフェッショナル集団が必要である。最近外国から教員をリクルートするが、口を揃えて、なぜこんなに書類書きが忙しいのだと言われる。秘書など必要ないと思ったが、いなければ仕事はできないと言って、文化の違いを憂えられることがある。日本的な良さもあるが、仕事を適切に分担し、スムーズに経営するためには、教員は研究や教育のプロであって、決して大学経営のプロだとは思わないので、その意識を改革することが大事。

そのための大事なきっかけは、大学経営者に大学を経営、運営するための予算措置が適切になされることであって、外部資金の間接経費や大学の運営費そのものが大学経営のために確保されるシステムを整えることが重要ではないか。大学の先生の意識を変えるのは簡単ではないが、外国経験のある先生たちはその状況を知っており、決して不可能ではないと思う。

(山内委員)

○ 問題意識があっても、それを現実に変えていけないのが総長であり、総長にはそういう権限もない。そこをどう変えるかということについての道筋をきちっと出さないと、予算だけをもらえばよいという今の大学人の平均的考えと同じになってしまう。運営や使用は結局大学人任せでよいということになる。最後に既得権益の問題がかかってくる。それをどう突破するかということを具体的に議論しないといけない。

(大竹委員)

○ 今の意見に賛同する。下村大臣と総理大臣が既得権益という強力な岩盤にドリルを当てていただく以外ない。

(鈴木委員)

○ 日本の大学の場合は、やはり法的な面から変えてしまう、自助努力に頼らないで外圧でやってしまうしかないと思う。

小中学校、高校の教育については、やはり政府であるとか文科省がある程度強力なてこ入れをする形で、経営者とか経営陣を孤立させなければ、十分に学校は改革していける可能性がある。

(山内委員)

○ 予算権、人事権などの既得権益というものを手放さないのが大学人であり、大学内部で自立的に改革することは非常に難しいということを経験知として申し上げたい。

(鈴木委員)

○ 私学だが、理事もみんな改革に賛成、事務当局もやりましょうということを行っていたが、教授会だけが動かない。これは一体何なのだと自分も考える。

(鎌田座長)

○ 大学もそれぞれの事情を抱えており、国公立と私立でも違い、それぞれの大学の成り立ちと運営の仕方によってさまざまです。教育的な配慮についても、大学全体として10年前、20年前の授業と今の授業は全く違う。東京大学も含め、非常にきめ細かな学生の立場を考慮した授業に変わってきていると思う。

ガバナンスの点については、自己改革を進めなければいけないという意識が大学の中で共有されていないと、制度だけつくってもなかなか変わらないという側面もあるが、大学の国際的な競争が激しくなっている中で教員全体の危機感は高まってきている。そういう教員全体が今の日本の大学を変えないと、日本の大学だけではなく、日本の国自体が危うくなるのだという意識を共有していくことが基盤として必要。そういう環境がある種の外圧によって、以前に比べて急速に整えられつつある。それをより加速するような政策的な方策を講じていくということが必要なのではないかと思う。

(下村文部科学大臣兼教育再生担当大臣)

○ 今日の高大接続・大学入試の在り方の前提として、高校教育、大学教育の在り方についての議論だが、大学教育については大学のガバナンス、大学そのものの運営の仕方というような議論が中心だったのではないかと思う。

高校教育については、多くの方々から夢、志という話があった。昨日、安倍総理、鎌田座長のふるさとである山口県で全国高等学校PTA連合会の全国大会があった。スタッフの方々のTシャツには「志」とあり、キーワードは志だということで、PTAの方々もここで議論されていたのと同じような危機感、思いを持っていた。私から75分間、日本の教育再生ということで教育再生実行会議で議論され、決めていただいたことを中心にプレゼンした。国がどんな教育再生をしようとしているのか、きちっと聞いたことがなかったということ

で非常に関心を持っておられ、できたら2年後ぐらいにどの程度達成したかの検証をもう一度聞きたいという話もあったぐらい、教育改革に対してPTAの皆さんも関心を持っていた。

昨年11月にOECDが世界の長期経済成長見通しを発表した際のコメントとして、私たちの子孫が暮らす将来の世界は、これまでとは全く異なったものとなるだろうと。教育と生産性は今後の経済成長に向けた牽引力となるため、世界全体でこの分野の政策が優先されるべきとOECDは発表している。それだけ、教育は未来に対する先行投資ということだけではなく、各国が生き残っていくための最重要テーマ。当然、安倍内閣においては、OECDに指摘されるまでもなく経済再生と教育再生は、経済再生の中の科学技術イノベーションに沿った人材育成を支えるためにどうしていくかということも含めて、大変重要なテーマになってきている。その中で高校教育と大学教育の在り方を踏まえ、大学入学試験がどうあるべきかということを考えて場合、求められる能力は今までのような単に学力一辺倒の1回勝負のテストでは測れない。もっと本質的な意味でのこれからの時代に問われる教育力は何なのか、子供たち、学生に対して何をなすべきかということが高校教育、大学教育の中でも問われるのではないかと思う。

数日前までロシアに行っており、東京オリンピック、パラリンピック招致に向けての活動の間を縫って、ロシアの宇宙開発等の科学技術関係の要人と会った中で、ロシアの教育・科学技術担当の大統領補佐官の方から哲学的な話を提起された。つまり、教育によって幸せ、幸福感をどうつくるか。一人一人の学生に幸福感を持ってもらうための教育をどうすべきか、どうあるべきかということについて考えあぐねているし、日本はそれをどうしようとしていますかという話であった。調査機関が世界幸福度調査というものをしており、その中の1つの統計では200カ国近い国の統計の中、日本は90位、中位ぐらい。これだけの経済大国で豊かな国と言われているにもかかわらず、幸福度は世界の真ん中ぐらいで高くない。ロシアは実は167位である。

OECD諸国がこれから目指すべき教育は今までの延長線上ではなくて、ひとつのキーワードとして多様化という話もあったが、伸びる子はもっと徹底して伸ばす。一方で、発達障害等の子供の話もあったが、それぞれの興味関心に向けて、本人の持っている潜在能力をどううまく引き出すか、また、それぞれの志というのは当然人によって違い、他者との優劣関係の中で志があるわけではなく、それが結果的にその人の生きがいになってくるかと思うが、教育をツールとして、それをどうサポートしたらよいかという中で大学入学試験をどうすべきかは非常に本質的、根本的な話で、この議論をしていくことは当然に高校教育なり大学教育をどう変えるかということになってくるかと思う。

今日は大学運営の話があったが、既に第三次提言でも出されており、いかにそれを実行に移すかということで、教授会の見直しについても中教審で議論しており、その中で、そもそも大学の学長をそういう選挙で選んでいいのかということなど、果たしてそれが本当に優れた大学にしていくためにいいのかどうかという議論も必要ではないかと思う。今後はグローバル化の中で、国際的な感覚の中で日本の大学経営をしていかなければ、そもそも日本の大学そのものが生き残っていけないという中、法改正も含めながら、ぜひ教育再生実行会議で提言されている部分も含めて着実に実行していかなければうまくいかない。

残念ながら、第一次安倍内閣の6年前の教育再生会議でも提言されていたが、それがことごとく実行できなかったという挫折感を我々は持っている。ぜひ今回の第二次安倍内閣の中で、教育再生実行会議で同様に提言されているし、またこれからも提言され、会議も「実行」という名前がついているので、それを受けて政府側も実行できるようにきちっとやっていきたい。

今回は、さらに大学入学試験そのものの在り方について議論していただくということになる。大学入試の在り方は教育の方向性を定める根本的なテーマ。これで今の高校生が右往左往するというのではなく、もっと先の大学入学試験の在り方についての議論になってくる。拙速ということではなく、じっくりと議論をしながら、なおかつ国民的な関心を常に持っていただきながら、本当に目指すべき方向の理念等を明確にする中で入学試験をどうするのかということ提言していただかないと国民の理解は得られない。ぜひ引き続き議論していただきながら、日本というよりは世界共通のテーマにもなっているが、一人一人の可能性をもっと引き出して、そして生き生きと幸福に暮らせるような社会の中での教育の在り方について議論していただきたい。

○ 座長より、教育再生会議報告のうち高大接続・大学入試関係事項について現在までの実施状況をまとめたものを配付している、参考にしてほしいとの発言があった。

また、次回の会議では、本日の高校教育・大学教育の在り方の議論を踏まえ、高大接続・大学入学者選抜について議論することとされた。